

## 初もの尽くし

今回（平成16年9月13～15日）は何かにつけて初めてのことが多い旅になった。

まず今回は社会人になって、冠婚葬祭と病欠以外で初めて取った有給休暇である。そして当然、有給休暇で行く旅も初めてである。

これはこの夏辺りから有給休暇を取るよう言われ始めていたためである。既に一部の上司らに取り始めていたので、それなら私もということで取った。それに私の同僚たる同年代の人にも取りやすくするための取得でもあった。これまで会社自体に有休を取ることを快よしとしない風潮があり、こういう空気は社員は敏感に感じるから、誰も休もうとしなかった。

でも、ここ数年は土曜日もほぼ出勤という状態になり、社員の中からも有休が無理ならせめて土曜日くらいは休みに、という不満が高じてきた。土曜日を全休にできない現状からはさすがに会社としても、ここへきて有休を認めるようになった。何の気兼ねもなく取れるようになればいいと思っている。これに続く同僚も出てくるであろう。

これを労働基準監督署の方が見たら、すぐに調査に入られそうだけど、中小企業の現実とはこんなものだ。

いつも愚痴から始まる私の旅の始まりも今回ばかりはすんなり取れた有休ということもあって上機嫌である。

このように有休を取ってまで今回旅に出るのは、楠君と会って山口県を回るからだ。これまで楠君と会うというと、私のほうで土日でないが無理だということで、いつも彼に有休を取ってもらったり、彼の仕事を承知で下松へ赴いていたりしていたのだが、今回は私のほうで楠君の休みに合わせて有休を取って山口へ行く。

今回取った有休は3日間で曜日も火、水、木曜日である。どうせ上が奨励する休みだから派手に取ったほうがいだろうと思っての3日間だが、最後の一日は所用で高松にいないければならないので、旅の日程としては前日の夜発の正味2日間である。派手に取ったといっても週の真ん中の3日間だから大したことはない。目黒君などは正に労働基準監督署の職員で、有休消化を最も奨励する役所だ。だから、取るときは月曜から金曜で取って前後の土日と合わせて9連休にしたりする。こういう実例を目の当たりにすると、私などまだまだだと思ふ。とはいっても、9連休などといった休みの取り方ができるのは、公務員か大企業に勤める人くらいのものなのだろう。

今日は蒸し暑かった。ただでさえ長かった一日が暑さのせいで余計長く感じた。9月も半ばだというのに、今日も32℃まで気温が上がったという。このところ、過ごしやすい日が続いていて、そろそろ秋めいてきたのかなと思っていたものだが、季節は一気には進まない。

有休を取って旅に出るのも楽ではない。当たり前だけど、それまでに仕事をまとめて仕上げておかないといけない。営業と総務の二足のわらじを履いている私としては事務的な仕事は10日分ほどまとめてやっておいたから帰ってからも問題はなさそうだけど、営業となると突発的なことも多い。しかし、そんなことを言っていると、いつまで経ってもキリがつかないから、今日の時点では全て終わらせて、あと帰ってからの仕事の一部も下地だけはやって帰宅する。だから、退社したのは21時を回っていた。朝は5時半に出ていたから労働時間は15時間半を超えている。こんなに会社にいたのはずいぶん久しぶりの

ことである。

帰宅したのは21時半頃で、すぐに風呂に入る。作ってくれていたご飯もさっさと平らげて家を出る。予定では高松まで妻に送ってもらって22時16分発の「マリンライナー70号」乗ることになっていたのだけど、少し余裕がほしいので、少し先の端岡まで乗せてもらうことにした。この時間なら私の家からだと、高松へ行くのも端岡へ行くのも時間的にはそう変わらない。端岡なら10分以上の待ち時間はあるだろう。切符を買ったりしていると、そのくらいの時間がちょうどいい。

22時前に家を出て、国道11号東バイパスを西へ走る。こんな時間にこの道を私用で走るのも珍しい。それにしても22時だというのに、車の通行量は少なくない。

端岡駅には22時15分頃に着いた。予定通り発車10分ほど前である。高松と端岡では同じ10分の待ち時間でも気分的に違って、何となくゆったりしている。券売機で坂出までの切符を買って、しばらく待合室で話しをする。

予讃線端岡駅は高松から3つ目の駅で、昼間は特急も快速「マリンライナー」も停まらない地味な駅だ。でも、高松から比較的近いこともあって通勤・通学客が多い。近年の利用客増の影響もあって従来の2面3線ではさばき切れず、3面4線という構造に変わったしかし、駅構内の敷地面積は変わっていない。

説明すると非常に長くなりそうで恐縮するのだが、かつては駅舎寄りに上り線となる1番線、誇線橋を渡って、島式のホームに上下共用の待避線となる2番線、下り線の3番線という具合だった。

従来、高松ー坂出間には待避線を持つ駅は2面3線のこの端岡しかなかった。しかし、ここ数年のダイヤ改正の結果、本数が著しく増えて、さらなる列車増発が難しくなってきた。そこで端岡から3つ先の鴨川とともに駅の改修工事が施されることになった。

鴨川駅は駅の裏手に貨車の引込み線が数本あり、これを活用することで2面4線という形がすんなりできた。しかし、端岡の場合はそうはいかない。駅前には旧国道11号から少し入った住宅地の中にあり、また駅の背後にはすぐ田んぼが広がっているため、これ以上の拡張はできない。

そこで端岡駅の長い有効長を持つ待避線ホームに目を付けた。この待避線はそもそも貨物列車の待避用に長く取ってあるらしく、これは今の短編成の旅客列車や貨物列車には持て余してしまうくらいの長さである。そこで待避線と下り線のある島式ホームを東西2つに分断して、島式ホームを高松寄り、松山寄りにそれぞれ1つずつ配して、これをもって2面4線とした。つまり、上下とも待避線を有するようになり、これは列車増発に大いに貢献したものである。しかも、駅舎寄りのホームを0番線とあらためて、反対側の1番線と両方のドアを開けて、誇線橋を使わずに乗り換えと乗降をできるようにするなどの配慮もしてある。

これらの設備が完成した平成14年3月のダイヤ改正で、高松ー坂出間が快速運転となる快速「サンポート」が高松ー観音寺、琴平間に毎時各1本、高松ー多度津間を30分間隔で運行される列車が登場した。これは従来の各駅停車の快速化ではないまったくの増発で、しかも端岡には全列車、他の駅にも一部が停車することから各駅停車の乗客からの乗り換えも可能としている。「マリンライナー」は高松ー坂出間が早朝深夜を除くとノンストップだから、これは画期的なことである。

そういう変貌を遂げた端岡駅から旅に出るわけだが、時計を見ると発車3分前で、ようやく無人の改札を通る。島式のホームが2つになったから、誇線橋も2つに分かれた。始めは間違えて上り列車の誇線橋を上ってしまい、慌てて下り線のほうへ渡った。便利な設備も慣れないとこういうことをやってしまう。ホームに着いた頃には「マリンライナー」

はちょうど入線しようとしていた。

22時25分、「マリンライナー70号」は多くの通勤客を降ろして発車する。乗ったのは私を含めて2名。この時間に端岡から乗るのはせいぜい私くらいで、他には皆無だろうと思っていた。向こうもそう思っているかもしれない。恐らく最初で最後の端岡発の旅がスタートする。

端岡で降りても、まだ車内には十数人乗っている。でも、いたって静かだ。ただ、車のミッションのシフトレバーを上げるかのようにウィーンウィーンと唸る、電車のVVVFインバーターと呼ばれるモーター音だけが響いている。

ところで、今乗っている「マリンライナー」の車両は昨年10月のダイヤ改正で登場した新型車量だ。関西の新快速でおなじみの223系電車と同系列の車両で、223系5000番台という。登場から1年近く経過しているから新車とは言いがたいけど、なんとこれに乗るのは初めてだ。5月の北海道行きするときには行きで乗る予定だったのが、凶らずも飛行機になり、その帰りは「サンライズ」であった。この間、会社で出張などもなく、結局乗らずじまいでここまでできてしまったのだ。

今日は坂出までの乗車だから、時間にしてわずか15分ほどである。本格的な乗り心地などは帰りの「マリンライナー」で満喫しようと思う。でも、新たな発見はある。座席の配置は関西の新快速と同じで、ドア脇にはドアの開閉ボタンがあり、折りたたみ式の簡易座席も目新しい。ドアの上には停車駅などを案内する電光掲示板があり、視覚的にも分かりやすい。ドアが開閉する度に「ピンポンピンポン」と注意を促すチャイムが鳴るが、これも同じである。山陽本線でも走っているような錯覚を覚える。すっかり暗い道を走って22時36分、坂出着。

四国島内の旅でも、まず坂出で降りるようなことはない。しかも、「マリンライナー」の途中駅から降りるのも本州へ出る旅では絶対有り得ないことである。しかし、今回はその「あり得ない」行程で旅をしている。「初もの尽くし」というタイトルは伊達ではない。

坂出は私の営業の担当エリアである。だから、暗くて景色が見えなくても全く問題はない。駅正面に出て、すぐ左手にコンビニエンスストアがある。その間にある高架下の通路では高校生らしい若い男の子たちがスケートボードに興じている。こんな時間までよく遊んでいられるな、親は何も言わないのかと思いながら、ご苦労なことだと通り過ぎる。全国どこへ行っても見られる光景で珍しくもないけど、あまり褒められたものではない。少しだけコンビニエンスストアに入って一旦外に出る。

これから乗るのは夜行バスで、しかも福岡行きである。下松へ行くから、方角的にはいいのだけど、下松もしくはその付近が終着となる適当な路線がないので、やむを得ず福岡行きにして、途中の高速門司港というバス停で降りる。高速門司港はこの福岡行きバスの最初の降車駅で、そこから下松へ戻るようになる。下松へ行くのに門司まで行き過ぎて戻るというのもまた、ご苦労なことであるけど、逆から入るのも面白いだろう。それに下松の最寄りの徳山まで新幹線で行くより、こちらのほうが安いというのものもある。

当初の予定では13日の夜に下松に入って、再会ということだったけど、楠君の都合で会うのは14日朝からということになった。でも、13日夜出発というのがどうしても捨て切れなかったから、それなら夜行で出発して、自分自身の中で帳尻を合わせることにした。また、同じ夜行の山陽本線の寝台特急「あかつき・彗星」の寝台車か座席車も選択肢としていいとは思っただけで、これで岡山から下関なり門司まで行くのは贅沢すぎてなんだかもったいない気がしたので、手軽な夜行バスにしたのだ。それに夜行バスを利用するのは、学生のときのサークル旅行で大阪から上高地行きを利用して以来で、久しぶりに乗れるという興味もあった。

乗り場は駅前通りを北へ上がって1、2分のところにある。駅前通りというと華やかなイメージだけど、夜になると寂しいばかりで人も車もほとんど通らない。坂出を経由する高速バスは昼夜を問わずいくつもあるけど、福岡行きだけはなぜかこの場所からの発着。他の高速バスはどれも駅前の高速バス乗り場からの発着なので、何だか隔離されているみたいだ。既にそれらしい人が数人待っている。まだ発車まで30分ほどあるから、さっきのコンビニエンスストアに戻る。

20分ほどコンビニエンスストアでマンガなどを読んで過ごすうちに発車時間が近づいてきたので、500ミリリットルのビールを2本買って、バス乗り場へ向かう。23時を少し回っている。

この間、楠君からメールが届く。明日は山がいいか海がいいかという質問だった。いつも山口へ行くと山へも海へも行く。どこもいいところばかりだから「どちらでもいい」と答えた。どちらでもいいというのは、消極的な意味ではなく、どちらも見所が多いし、楠君なら変なところには連れて行かないだろうという信頼感もあって、「任せる」という意味である。あとで、「分かった」という返事が来たので、楠君の肚は決まったようだ。どこへ連れて行ってくれるか楽しみである。

バス乗り場には10人近くの乗客が待っている。このバスは高知始発で香川県の人を拾うため、坂出で高速道路から下りて坂出駅まで立ち寄るようになっている。高松まで寄っていると時間がかかり過ぎるのだろう、坂出を出ると、そのまま瀬戸大橋を渡る。そういう理由だから10人も坂出で乗ってくるのだろう。端岡同様、ここでもてっきり私一人が乗るものだとばかり思っていた。

名古屋行きのバスが私たちのバス停を通過して、駅前へと走っていく。それから少しして福岡行きのバスがやってきた。5分ほど遅れている。遅れてはいるけど、高速道路に入ると、時間調整など何とでもなるだろう。

みんな慣れているのか、荷物は床下の荷物室へ入れている。カバンを持ち込んでいるのは私だけであった。鉄道にばかり乗っていると、荷物を別のところに置くという概念がないので、ついつい癖で持ち込んでしまった。

乗ってみると、独立3列シートが10列ほど並んでいる。高知から乗ってきた人で10席くらいが埋まっている。私の席は前から4列目の左側の窓際である。前後の席は高知からの乗客で挟まれており、前の席の人がリクライニングを倒して、後ろの人が私の席の肘掛に足を投げ出して、このままではとても座れない状態であった。

発車から2時間も経てば、もう寝ている人もいるだろう。夜行バスだから、寝るしかないのは当然だけど、仕方なく前の人を起こして自分の席に座る。不機嫌そうな顔をしてシートを起こす。私は空いた自分の席に落ち着くと、荷物を足元に置いて靴を脱いで、前の座席にあるフットレストを出して足を乗せた。間もなく発車。時計を見ると、23時17分であった。そのうち、前的人是隣の空いている中央の列に席を移して、私が乗るまでと同じようにシートをこれ以上倒せないくらいにして、床に就いた。もうこれ以上乗ってくる人はいないわけだから、空いている席に移動しても特に問題はない。私が始めからそうしていればよかったかな、と少し後悔する。でも、慣れていないとそういうことも思いつかない。

シートは少し硬めで普段乗るバスと同じ感じだ。前後のスペースはもう少し広いほうが良い。ただ、席は独立している分、ある程度のプライベートは保たれていて気兼ねすることはない。しかし、私の鉄道びいきを差し引いても、居住性は鉄道のほうが圧倒的に勝っている。

バスはすぐ駅前の信号を東に折れて、最初の信号を北へ上がって、坂出市役所や合同庁

舎のある通りを抜ける。旧国道 11 号を横切って、さぬき浜街道を西へ向かい、両景橋付近で坂出北インターチェンジに入る。ここから瀬戸中央自動車道だ。

ビールを早く飲まないで、温くなるのでいつもよりペースを上げて飲む。2 本も買うからそういうことになるのだけど、たった 2 時間前まで仕事をしていた後の旅立ちだからいいことにする。

20 分も走ると早くも鴻池パーキングエリアで、本日最後の休憩を取る。ここでほとんどの人が降りてトイレなり体を伸ばすなりして思い思いに過ごしている。私は今乗ったばかりだから、ここで休憩はしない。

0 時になる。バスは再び動き出し、次は明日の早朝の壇ノ浦パーキングエリアまで休憩はない。ビールをさっさと飲み干して目を閉じると、すぐに眠りについた。

4 時頃に一度目が開いて、その次は放送で目が覚める。外を眺めてみると、壇ノ浦パーキングエリアに停まっている。5 時前のこの時間でも何人かの人には外で休んでいる。ちょうどいい具合に目が覚めたものだ。途中何度も目が覚めるものと思っていたけど、何事もなく意外なほどに熟睡できた。それだけ疲れていたのかもしれない。

壇ノ浦だから門司はもう少しだ。まだ暗い関門橋を渡ると、高速門司港に着いた。時間は 5 時 15 分で、時刻表より 20 分も早く着いた。

真っ暗なバス停に降り立つと、11 トン車くらいの大型のトラックが横を走りぬけて行く。高速道路だけに風圧は一般道とは桁違いだ。

階段を下りると、ちょうど門司港インターチェンジの脇の歩道であった。各方面行きの案内板がある。東京をはじめ、さまざまな地名が並んでいる。さすが九州は四国と違って路線も多い。

太い道に出ると、県道 72 号である。県道といっても片側 2 車線の道で紛れもなく幹線道路だ。

さて、どちらへ行けばいいのか、と考えてしまう。でも、事前にこの辺の地図を見てきたので、その記憶をたどって歩くことにする。方向は間違っていないだろう。距離は 1.5 キロか 2 キロくらいのようなことから、30 分くらいかかると思われる。

暗いとはいっても空は黒から徐々に紺に変わっているし、5 時台にして車通りも多いから、気味が悪いというようなことはない。でも、みんな夜明け前の道を高速で飛ばしているのだから、タクシーが走っていても捕まえるのは難しいだろう。それに手を挙げても多分気づいてくれないに違いない。



そういうわけで歩いて門司港駅へと向かう。こういう道だから路線バスがあり、ときどき現れる各停留所にはもう数人ずつ並んでいる。でも、どこへ連れて行かれるのか分からないから、乗らないことにした。この辺りを走るバスなら、どの系統でも門司港は必ず立ち寄りとは思うけど、そのまま歩き通す。出勤にしても遊びにしても、私を含めてみんな朝早くから出かけるものである。

黙々と歩いて、5 時 45 分頃に門司港レトロに着いた。ちょうど 1 年前に訪れた駅周辺の街並みのエリアのことである。もう 6 時前なので、すっかり明るくなっている。

さっそくカメラを取り出して、1年前に撮った建物をまた撮ろうと電源を入れてみると画面に「バッテリーを充電してください」とのメッセージが出る。一昨日充電したばかりなのに、バッテリーが切れることもなかろうと思ったけど、よく見てみると、本体にバッテリーを装着している上に電源が入っていた。これではバッテリーもなくなるわけだ。これで少なくとも楠君に会う9時前まではカメラは扱えない。充電時間を含めると、もう数時間は使えないだろうから、復旧はお昼前になるだろう。

でも、これでは最低でも半日の撮影はできないことになる。それでは困るので、門司港駅前にあるコンビニエンスストアで使い捨てカメラを買う。去年同様同じ九州の地で同じように使い捨てカメラを買って急場を凌ぐことになった。あのときは最終日で充電切れに見舞われたけど、今回は初日にして1枚も撮らないうちに電池を使い果たしてしまっているから、どちらがましかは明白である。

充電が完了するまで楠邸でカメラの充電をしてもらうか、楠君の車のシガレットから電源を取って移動しながら充電してもらうか、携帯電話のメールで連絡する。すると、こっちに着いてから決めよう、という返事が返ってきた。さらに今回の目的地が大島であることも合わせて連絡があった。

いきなり無駄な出費を余儀なくされた上に、駅に着くまでに見てきたレトロな建物も撮ることができず、仕方なく門司港駅と関門橋を撮るのみに留めた。買ったカメラは39枚撮りで昨今の私の旅先での撮影枚数からすると、1時間もあれば無くなりかねない枚数だ。楠君と会うまでは儉約しながら撮影していくことになりそうだ。

天気は曇りだ。関門橋も雲のせいではっきりと見えない。そんな中、朝の6時ともなるとジョギングや犬の散歩をしている人たちが目に付く。岸壁で釣りをしているおじいさんの姿もある。まだ一日の営みが始まる前といった雰囲気が残る「ブルーウィングもじ」からフェリー乗り場へ続く歩道の光景である。

門司港駅はこれから駅舎の改装を始めるようで、足場が組まれつつある。撮影には少々邪魔だけど、これもそのときどきの表情だから今回も撮影する。朝日を受けて、白い駅舎がより白く映えている。

門司港駅はトイレと洗面所が分かれている。かつての夜行列車が発着していたころの名残を今に留めていて好きなのだが、用を足したら、顔を洗おうと思っていたのに、すっかり忘れて素通りしてしまった。夜行明けだからこそ、洗面所の雰囲気を味わおうと思っていたのだけど、もったいないことをしてしまった。



ここで高松までの乗車券を買って、改札を通る。6時16分発の南福岡行き普通列車に乗る。タッチの差で6時03分発の博多行き普通列車は出たあとだったので、既にホームに入っているこの列車に乗り込む。数えていないけど6両くらいの編成で、813系電車だ。ステンレスの車体に赤と黒を身に纏っている。

さまざまな車両が朝のラッシュに備えている。特急「かもめ」の885系電車の姿も見える。発車までの間にパンをほおぼる。メモを取っているうちに、時間が来て発車する。

右手に古めかしいレンガ造りの倉庫やその向こうに見える玄界灘を見ながら、のんびり

走る。小森江を経て6時22分、門司に着いた。ここで降りる。

次に乗るのは小倉発長門市行きの普通列車である。キハ47形気動車の2両編成で、乗客はあまり多くない。山陰本線方面へ通勤する人は少ないのだろうか。それともラッシュの前なのかもしれない。もっとも、関門トンネルを挟んで隣の県へ行くわけだから人の流れが細くなるのはやむを得ないことだ。エンジンを唸らせて、6時30分発車。

在来線の関門トンネルを通るのは久しぶりのことだ。発車して1分もすると、トンネルにもぐる。真っ暗な中をディーゼルエンジンを響かせながら走る。春に通った青函トンネルと同じ海底トンネルとは思えない普通のトンネルだ。距離も3キロ程度で、普通列車でも3分もかからないうちに抜けられる。関門海峡をくぐって6時38分、下関着。またまた降りる。門司港から下関への移動だから2回の乗り継ぎは仕方ない。



長門市行きはここで7分停まるので、ゆっくりしているけど、私が乗る岡山行き快速「山陽シティーライナー」は6時41分発で慌ただしい。でも、同じホームから出るので、乗り換えはスムーズにできた。115系電車の4両編成で、うまい具合にクロスシートが空いていたので、そこへ腰を下ろす。各ボックスに1人ずつのといった乗車率だから、ラッシュにはまだ程遠い。ただ、このあと確実にラッシュに絡むので、ひょっとすると通勤型の103系電車かもしれないと危惧し

ていたけど、115系電車であったのは幸いであった。

はたぶ

もともと操車場のあった、ただっ広いところを走って幡生に着く。ここで山陰本線と分かれる。更地の上に草が生い茂っていて寂しげだ。

次は新下関で、新幹線と接続するのは関係ないと思うけど、早くも若干の入れ替わりがあって各ボックスに2人ずつの乗車率になった。下り線のホームには多くのスーツ、制服姿の通勤・通学客が見られる。

おづき

長府を出ると、寝台特急の「富士」と行き違い、神田川を渡って小月に着く。右には即席めんの「カップヌードル」の巨大な看板を屋上に頂いた日清食品の工場が見える。かなり大きいので相当目立つ。こういうのは、私のような人には通る度にどこそこへ来たのだという目印にもなるので、大変いい存在になる。でも、そういう人のために作ったものではないから、そこで勤めている人たちは心外かもしれない。

乗客は駅ごとにどんどん増えてくる。今日は平日である。下関以来乗ってくるのはサラリーマンや高校生ばかりだ。日常の生活の中に日常からかけ離れた私がいる。こういうのは学生時代以来で、こんな旅もたまにはいいなと思う。

長府を過ぎた辺りから山と田んぼの風景が広がる。あぜ道には彼岸花がたくさん咲いていて、秋を感じる。小月を出ると、木屋川を渡ってレンガ造りのトンネルが続く。トンネルの間から瀬戸内海がちらちらと見えてきた。

はぶ

山陽オートが見えると、埴生に着く。この施設もまた埴生へ来たことを知らせてくれる目印になっている。ここでも乗ってくるばかりで降りる人はほとんどいない。

あさ

7時14分、厚狭に着く。新幹線の高架にはちょうど100系電車の4両編成の上り列車がホームに入っているところだ。「こだま540号」の広島行きのものである。新幹線電車がまさか6両や4両で走るなど思いもしなかったけど、これも時代の流れだろうか。厚狭に到着すると乗客はさらに乗ってきて、立ち客でいっぱいになった。

この辺は駅と駅の間は山間ばかり走っているけど、案外開けていてカーブも緩やかだ。だから、視界もよく見晴らしはいい。私はのんきに列車に乗っているけど、周りはいちから一日のスタートという人たちがばかりだ。やはり今日は平日である。

厚狭から厚狭川を渡り、南に下りて7時20分、小野田に着く。ここでは逆に大量に降りていった。市の中心駅は会社が多いだろうし、学校は中心駅はもちろんその前後の駅にもあるから、そういう駅では降りる人が多い。そんな流れを見ていたら、小野田線の合流に全く気付かなかった。

沿線の県道もだんだん混んできた。小野田方面も宇部方面も車が数珠繋ぎになっている駅の近くではもっと混むのだろう。間もなく、宇部に着く。ここでも大勢が降りていった続けて多くの人が降りたので、車内の立ち客はほとんどいなくなった。

ことう

発車すると、宇部線がすぐ右に分かれていき、再び北へ方向を変えると、厚東川が寄り添ってきた。新幹線と併走して厚東に着く。

ところで、今年は台風がやたらと来ては各地で大いに猛威を振るったけど、いつもは見掛け倒しで終わることの多い香川県も例外ではなかった。先々週の8月の末の台風16号と先週の9月頭の台風18号と相次いでやって来た台風は山口、香川ともに甚大な被害をもたらした。香川の場合は雨よりもむしろ風台風で、その風が起こす潮位の上昇と大潮プラス台風接近時と重なった満潮による高潮のせいで深夜の高松市の海や川の近くの建物という建物が海水と川の水で漬かってしまい、亡くなる人も出た。市街地のビルでは地階に水が流れ込み、下水処理場ではその処理能力を上回ったため、あぶれた下水が周辺に流れ出てしまったから、家や事務所で使っていたものが何もかもが駄目になったようだ。海に近い地域では街路樹が塩害で枯れてしまっている。濡れて使えなくなった家財道具の処理地下に流れた水のくみ出しや浸水した家屋の消毒などここ2週間はゴミの処理業者や消毒会社は大変だった。

一方、今走っている山陽本線沿線も被害は大きいようだ。テレビのニュースでそういう情報は知ってはいたけど、実際に見ると、映像とは違って迫真力がある。ところどころの家屋では屋根が飛んだのかブルーシートが被せられている。田んぼの稲も黄色く色づいてはいるものの、ほとんどが倒されていて、そのまま立ち枯れのようにになっている。十分に生育していないように見えるくらい線も細い。昔ながらの倉庫などは土壁が崩れたりして半壊している。ビニールハウスもビニールが飛んでいて、骨組みだけになっている。楠君に聞いたところでは、9月頭の台風のときは休みだったけど、一日停電していたため詳細が分からなかったようで、電気は深夜になってやっと復旧したらしい。

列車は山を避けるためか、また南に向かう。そのうちきらら浜へと向かう県道216号と併走する。車は特に宇部方面が渋滞していて、逆の阿知須方面もいくらか混んでいる。山口宇部道路をくぐって本由良に着く。枯れた田んぼの真ん中に駅がある。そこには白鷺が10羽ほど佇んでいる。そんな本由良からも高校生を中心に大勢乗ってくる。

あじす

かがわ

本由良を出て、「さくら・はやぶさ」とすれ違う。そして、嘉川に着く。田んぼが広がってはいるけど、住宅も多くなる。右手には次の新山口で合流する宇部線がもう見えている。併走しながら7時47分、新山口に着く。去年の秋に小郡から駅名が変わったけど、



それ以外で変わったところはない。当然といえば当然である。でも、私としては、駅名は小郡のほうがよかった。

左手に広大な更地がある。多分、側線の跡だろう。それだけ大きかったわけだけど、逆に言うと、ここまでは必要なくなったということでもある。寂しい話ではあるけど、仕方がない。最近はどこへ行っても、こういう光景を見るようになった。

新山口では5分停車する。ここでほとんどの乗客が降りていった。乗客はおのおの駅で降りるか宇部線や山口線に乗り換えている。しかし、閑散としたのも束の間で、隣のホームに到着した山口線のホームから、とても2両編成から降りてきた数とは思えないほどの乗客のほとんどがこちらに乗り込んできた。これでまた車内は立ち客でいっぱいになったほとんどが高校生だ。

ふしの  
7時52分に発車すると、榎野川を渡る。ここまで私のボックスにはせいぜい1人くらいしか相席で座る人がいなかったけど、新山口から女子高生2人が向かいに座った。私の隣の通路側の席には別の女子高生がカバンを置いて、自身は通路に座り込んだ。周りは女子高生だけである。悪い気はしないけど、あまり多すぎると目のやり場に困る。それにしても、通路に座り込む女の子というのもどうかと思う。近頃こういう子が増えているが見ていて感心するものではない。

よつじ  
風情ある木造駅舎の四辻を出ると、また台風の影響を受けた家が目立ってきた。昔からの農家は萱葺き屋根だけど、最近はそのをトタンなどで覆いをしている家が多い。それがこの台風でトタンが飛んでしまっていて、萱がさらけ出ている。これでは雨漏りなどもひどかったかもしれない。

だいどう  
大道は近郊駅の雰囲気、駅の南側には多々良学園高校がある。真新しい校舎で新設校かと思えるような学校である。後で楠君に聞いたところ新設ではないという。でも、昨年買った中国地方の道路地図には載っていないので、移転してきたのだろう。しかし、どこかで聞いたことのある名前である。高校サッカーの全国大会の常連校だということを楠君から聞いて納得する。ここで通路に座っていた女の子をはじめとして、ブレザー姿の高校生がたくさん降りていった。

横曽根川と佐和川を渡って、高架に入って防府に着く。高いところから見渡す風景はなかなかいいけど、雲のために周辺の山々はその多くが隠れている。でも、雲は多いものの雨を降らせるものではなさそうだ。私と相席になっていた2人を含め、高校生はここで全部降りた。8時を回ったから、もうすぐ授業が始まる。残ったのは出勤する人と学生で、立ち客は減ったけど、まだ大勢乗っている。

防府を出て、少し行ったところに小さな貨物駅のような施設があった。といっても、無人のようで、そこにコンテナが山積みされているだけである。列車は普通のスピードで走っているのだから、結局何か分からずじまいで通り過ぎてしまった。

変な施設もあるものかと思いつつ先へ進むと、久しぶりに瀬戸内海に出た。

とのみ  
富海海岸だ。夏には海水浴場として賑わいを見せる。ここには楠君の仕事場の元同僚が住んでいる。一度だけ富海から



乗ったことがあるけど、静かでのんびりした雰囲気の駅である。木造であるのもいい。

私の意識の中では西から下松へ入る場合はこの富海から、東からの場合だと柳井からが楠君に会いに来たと感じる境の駅となる。ここまで来ると、「いよいよ来たな」との思いが強くなるのだ。共通しているのは、東西どちらから入ってもこの駅以降はどれも味のあ

る駅が続くことが挙げられる。この後の戸田や福川もそういう駅のひとつである。

駅名標の倒れている戸田を出ると、夜市川の細い流れに沿う。そして、下関行きの「あさかぜ」と交換する。これで東京発の寝台特急との行き違いは終了である。たったの3本で終わりとは、改めて少なくなったなと思う。

新南陽、徳山と相次いで降りていく。通勤客はここでほとんど降りていった。乗る人もあまりおらず、車内は一気に静まり返った。あとの通勤客は下松や光で降りてラッシュは終わるのだろう。

徳山を出ると、フェニックス並木の県道347号に沿う。徳山方面は通勤の車がまだまだ長い列を作っている。始業までまだ30分近くあるから、しばらくは渋滞も解消されないだろう。

どっしりした感じはあるけど、うらぶれた旧家の趣きの櫛ヶ浜を出て、岩徳線と分かれる。ごちゃごちゃした駅前を過ぎて末武川を渡ると、下松健康ランドの横をかすめて8時43分、下松着。下関からちょうど2時間の行程だった。

下松駅は駅舎の改装工事の真っ最中で窓口は塞がれ、キヨスクに隣接して仮の窓口がある。立ち食いそばのあったところは切符の券売機になっていて、これは廃業なのか改装が終わるまでの措置なのか分からない。下松駅の立ち食いそばは特に美味しいというわけではないのだけど、駅で列車を待つときにときどき食べていたので、なくなるのであれば寂しいことである。

橋上にある駅舎から階段を下りると見慣れた深い緑の軽の箱バンが見える。楠君だ。

「久しぶりやの」

「ホンマやの」

と楠君は言う、私に後ろを見るよう指を差す。見ると、テントやバッグ、大きなプラスチックケースなどが積まれている。

「すごいことになっとるやん」

整理ができていないのかと思ってこうコメントしたのだが、どうもその答えが意に反していたようで、

「今回はキャンプや」

「キャンプ？」

今までにない内容にちょっと戸惑う。キャンプというものは小学生のころに何回か参加したことがあるくらいで、かれこれ30年近く前のことになる。

「いやあ、いつもの車の中身かなと思って、ピンと来んかったわ。で、今回のキャンプ会場が大島というわけか」

「そういうこと。では、さっそく出発や」

ということで、車を走らせる。

「ところで、カメラの電池の供給はどうする？」

今朝方のカメラの充電切れに関しては、先述のとおりその時点で楠君にメールで知らせた。下宿で充電するか、移動しながら車のシガレットを利用するかということであったけど、当面は使い捨てカメラがあるので、それで持たせつつ電器店などで充電器具を捜そうということになった。

まず車は駅の北口から南側の県道 366 号に入って、東へ進む。各鉄道会社から発注された車両を造る日立製作所の横を通る。今日も見つからない車両を見る。

「ここで『のぞみ』も造るし、他にもいろいろ造っとる」

楠君は鉄道の知識はあまりないけど、さすがにお互いこの歳になると、自分の住む県内の経済や産業などの知識は学生時代と比べると、格段に増えているから鉄道に限らず、そういう情報はいろいろ知っている。

そして、国道 188 号に入る。この道は光市から岩国市辺りまで瀬戸内海に沿っており、私の好きな道のひとつである。楠君も大好きで山側をショートカットする国道 2 号よりもよく走るらしい。

それにしても、今日は晴天である。さっきまでの雲もかなり減った。

「ええのお。空も海も青い」

「ホンマ、気持ちええわ」

「こういうんは、なかなか見られん」

最初に立ち寄ったのは虹ヶ浜海水浴場である。時間は 9 時ごろである。いつもこうやって走っていて気になる存在ではあったのだが、一度も足を踏み入れたことはなかった。名前の通り、きれいな砂浜の海岸なのだそうだが、

「ひどいな」

「松が枯れとる」

「ここまで潮が来とる」



見ると、海水浴場の間近を走る道路の辺りまで海水が押し寄せた形跡がある。砂浜にもゴミや木が流れている。

「海はきれいやけど、砂浜があかん」

「そうやな、俺もあの台風以来来るんは初めてやけど、浜辺がここまでひどいとは思わなかったわ」

楠君もあまりの被害の大きさに驚いている様子だ。

「あそこに岩が欠けたようになってるやろ？あそこが多分貨物船がぶつかったところや」

先の台風 18 号で外国の貨物船が下松沖の笠戸島に座礁して、ほとんどの人が海に放り出されて行方が分からなくなり、結局その行方不明者は全員が亡くなるという惨事があった。同様の被害は広島でもあり、宮島の厳島神社も倒壊している。そういう現場を間近に見ると、いっそう生々しい。

数分で虹ヶ浜を出て、

「電器屋はまだ開いてないけん、電源はそれからや。その前に酒を仕入れよう」

と楠君が言う。キャンプ場へは 15 時から入れるようで、それまでは食料を仕入れながら、観光しようという楠君のプランである。携帯電話でキャンプ場に予約を入れている 9 月の平日なら、当日でも間違いなく取ることができるだろう。案の定、二つ返事であった。それから酒屋へ向かう。

楠君が向かったのは、よく行っている酒屋のようだ。国道 188 号から少し外れた住宅街の路地にあったので、知らずに行けるような店ではない。店内は昨今の焼酎ブームを反映してか焼酎のコーナーを広く取ってある。

「俺も今回世話になるけん、酒は持って来とるぞ」

「それなら焼酎にするか？」

「焼酎は俺、知識がないんや」

「俺も知らんな」

「じゃあ、日本酒にするか」

「そのほうが無難やの」

楠君と私はともにお酒は好きだ。会うとよく飲む。でも、悲しいことに2人とも焼酎の知識がないのだ。洋酒の知識も弱いけど、焼酎のそれはもっと弱い。それがお酒をたしなむ上で、もうひとつ世界が広がらないことにもなっている。何かにかけて知識は必要だけど、自分が楽しむものは特に必要だろう。そういうわけで、今回も比較的分かっている日本酒にする。

選んだのは、<sup>だっさい</sup> 昨年の夏に2人で買って飲んだ地酒の「獺祭」だ。大変美味しいお酒で、味は覚えている。今回買ったのは、その「獺祭」の最上級品と思われる吟醸酒だ。これはいいということで、買うことにした。

「これは齊さんへの土産や」

「それはいかんわ。こっちこそ土産持って来とんのに」

「いや、それは別。夜飲もう」

結局、4合瓶を持ってきて、土産に4合瓶を持って帰ることになった。鞆は軽くならずむしろ重くなって帰ることになりそうである。

車に再び乗り込んで、走り出す。夕方前に入るキャンプ場までは自由時間だから、楠君の「ミステリーツアー」に身を委ねる。

続いて訪れたのは室積海岸である。ここもきれいな海が見られるということで有名だと楠君から聞いていた。ここも虹ヶ浜海水浴場同様、車で走っていても道路標識でその存在だけしか知らなかったけど、初めて訪れることができた。もっとも、訪れることができたといっても国道188号を走っていて岩国方面へ行くべき三叉路を間違えて海岸方面へ入ってしまったためのハプニング的なものであった。

その県道146号に入る。もう10時が近い。あまり走ってもいないのに、時間が経つのは早いものだ。車に乗っていると、列車と違って時間の感覚が鈍くなり、早く感じることが多い。毎日営業で外回りをしているけど、もう少し時間がほしいということがよくある。

分からないなりに走っているうちに老人ホームの敷地に迷い込んだようで、悪いとは思ったけど、いても5分くらいだろうということで、そこに車を置かせてもらう。

敷地の向こうには砂浜があり、海が広がっている。さっき見た海と同じ瀬戸内海だけど、何となく違うような気がする。同じものでも見る場所が違くと表情も違う。それでも青々とした水面と雲のほとんどない空がどこまでも続いているのは同じだ。

そして、この室積でも台風が来たことを示すものが見られる。砂浜に打ち上げられた流木やゴミが潮の満ちたところで線になって残っている。これは虹ヶ浜でも見られた光景だけど、あちらは海岸だけだったから、それ以上何もなかった。



ところが、室積海岸は近くに漁港もあるから、もちろん人家もあり、虹ヶ浜とは少し様子が違う。

がびざん

海岸を見終わると今度は峨嵋山へ行く。その山へ登るわけではないけど標高は1,169メートルもあり、意外と高い。その峨嵋山から伸びる低いなだらかな丘のような半島がある。これが象鼻ヶ岬ぞうびがさきと呼ばれる岬で、象の鼻に形が似ていることから、このように名付けられている。

その付け根に普賢寺というお寺があり、平安時代からの由緒あるお寺だという。普賢菩薩が祭られてあり、「海の菩薩」、海上安全として全国各地から広く信仰があるという。江戸時代には毛利氏の直営祈願所でもあったとのことで毛利の紋がある。雪舟庭園というのもあり、5月にある祭りは大勢の人で賑わいを見せるそうだ。雑然とした様子だけど、山門が大きく、境内も広く、堂々としている。

普賢寺を少し見て車を進める。ちょうど室積漁港にさしかかったようだが、岸壁や近くの木造の建物が倒壊している。木も幹から倒れている。全壊もしくは半壊している家があり、それらの家にはブルーシートが被せられていて、被害の大きさを物語っている。高松の水害とはまた違った災害の爪あとが目の前に広がっている。

「何や、これは？」

「ここも台風が来てから見てないけど、こんなにひどいんや」

「門司から下松来る途中にも台風の被害の跡はところどころにあったけど、ここまでひどいのはなかったわ」

標識は支柱から曲がって天を向いていたり、他の方向に向いている。道路が陥没しているところや防波堤が崩れているところは、赤色のコーンを立てて通行の注意を呼びかけている。

ここでやり残していた発注の仕事を携帯電話でする。本当は出発する前に終わらせておくべきものであるけど、昨夜21時半に退社するまでにできなかった。だから、楠君には申し訳ないけど、旅先から電話を入れる。電話が終わると、



「大変やの」

「終わらせてなかったけん、しゃーないわ」

「そんなに仕事が多いんか？」

「その日によって違う。まあ、こうやって3日も休み取ったら漏れることもあるんかの」

「きついのお」

これで、仕事から完全に解放される。そんな私をよそに、周りは日常と変わらぬ生活が営まれている。ちょっと汗ばむような陽気の中、カタクチイワシを発泡スチロールの容器に広げて干している。

楠君が、

「あれがうまいんや」

日に照らされて、銀色に輝いている。

痛々しい漁港の家々を通り過ぎて、国道188号を横切る。小さな山の中腹に上がると、「かんぽの宿」がある。別にそこに泊まるわけでも用事があるわけでもなく、キャンプで

一夜を明かすから、行く必要は全くないのだけど、ここから見る象鼻ヶ岬がきれいだというので登ってきたのだ。晴天ということもあって、見渡す限り青い。雲も適度に浮かんでいて、のどかないい風景である。さっき見た漁港も小さく見える。

「ときどきここから見るんや」

「地元やから、泊まって見るわけではないんやろ？」

「泊まらんよ」

「こらこら、それはあかんやろ」

「いかんか？」

楠君はご機嫌である。

車は再度国道 188 号に乗って、岩国方面へ向かう。

「そろそろ運転変わろう」

「何で？」

「疲れた。実は昨日はあまりに疲れたけん、有休取って休んだんや」

「それで今日から会うことにしたんか。えらいときは休んだらええんや。じゃあ、今日は万全やろ？」

「いや、席変わって…」

「また寝るんかい？」

「寝る」

「いかん、あんたはホンマに寝るがな」

結局、2日とも運転は楠君で通した。別に私が運転してもよかったのだけど、今回は助手席でのんびりさせてもらった。

右手に瀬戸内海を見ながら、のんびり走る。

「イッパチは久しぶりや」

イッパチとは国道 188 号のことらしい。

「しょっちゅう走っとるようなイメージがあるけど」

「いや、なかなかこっちは来んのや」

「そんなもんなんや」

「大体、今回のキャンプにしても今シーズン初めてやで」

「何？行ってないんか？」

「そうなんや」

楠君はキャンプが好きで、毎年いろいろなところでやっている。海が多いようで、今回も海岸近くのキャンプ場である。

たぶせ

車は青空の広がる中を快走する。速度もちょうどいい具合だ。梶取岬で光市から田布施町に入る。時折り魚介類を食べさせるドライブインのような店が現れる。

「こういう店もええのお」

「そうやの。うまいんか？」

「ええ店はある。で、斉さんは飯食ったんか？」

「朝、用意しといたパンを食べた」

「そうか、こういう店のは昼くらいに食べたいけど、今はそういう胃じゃないな」

「昼でええよ」

「実は腹減つとんやけどの」



「食ってないんか？えらい口数が少ないけど」

「腹が減ったら、いかんのや」

まだ朝食を食べていない楠君は、横で見ていると元気がなさそうである。とにかく何か食べたほうがよさそうである。私にしても、朝食食べたのは6時頃だから、もう5時間近くになる。

ひらお

田布施川を渡って、平生町、また少し行くと柳井市に入る。金魚のちょうちんで有名な町である。これまでも楠君のところに来たときに何度か訪れている。昔ながらの城下町で情緒に溢れていて、好きな街並みのひとつである。

今日はその街並みは割愛して、まずキャンプに必要なもののうち、足りないものを買うことにする。駅近くのスーパーマーケットとホームセンターがひとつになったような大型店に入る。平日の昼前だというのに、客は多い。時間は10時40分頃である。

ちょうど店内にマクドナルドがあるので、ここで朝食を摂る。朝といっても、もう昼に近いといったほうがいい。

「マクドナルドとは珍しい。俺や滅多に食べんわ」

「そうか？俺はよう食べるぞ。手軽やし、朝は作らんしの」

「一人暮らしなら、そんなもんかの」

「あんまり、ようないけどの」

いろいろ話をして、11時過ぎに買い物を始める。足りないといっても、ほんの2、3つである。それも炭や水といった消耗品に備品が1つで、この備品も楠君のいつものキャンプでは使わないものらしいから、正味消耗品を買いに来たようなものだ。だから、15分ほどで買い物が終わって店を出る。

それから、少し行ったところにある食料品のディスカウントストアで、早々と夜の焼肉に備えて肉を買う。ビールも一緒にここで買う。まだ昼前だけど、準備は早いに越したことはない。

柳井を出る。そろそろシガレットから取る電源も確保しないと、門司港で買った使い捨てカメラも枚数が心もとなくなる。時間はまだまだあるので、やはり国道188号で岩国方面へ向かう。大島の駅付近を通ると、右手に夕方からお世話になる大島が見える。

「後で渡るぞ」

「列車でよう見るけど、やっぱりでかいの」

「そうやろ。今日泊まる場所は、ここからまだ30分はかかる」

「そんなにかかるんか？」

「ええところやぞ」

「島に入ってさらに30分も走るということは、かなりでかい島なんやの」

「うん、相当でかい」

初めてのキャンプもだんだん期待が膨らんでくる。なかなかいいかも知れない。

「錦帯橋へ行こう」

と楠君が言うので、

「ええよ。前行ってからだいぶ経つけんの」

「前はいつやった？」

「『きらら博』のとき以来や」

「言うたら、3年前か」

「そうやの」

これは家族旅行で山口へ行ったときのことだ。あれから3年も経つのかと思う。

「錦帯橋も架け替わっての」

「聞いたことがあるわ。いつやったっけ？」

「去年や」

「じゃあ、きれいやろの」

「そやの」

由宇町に入る。瀬戸内海の向こうに岩国の工場群が見えてきた。車はずっと瀬戸内海に沿っている。そろそろ12時が近い。昼時ではあるけど、さっき食べたハンバーガーがまだお腹に残っているから、今はまだいらぬ。途中で時々現れる海鮮料理の店など美味しそうで食べたいとも思うけど、ここは先を急ぐ。

12時20分頃、岩国市内に入ってビル街の中を走る。見たこともないナンバーの車が走っている。あれは米軍の人の自家用車だと楠君が教えてくれた。基地のある町はちょっと雰囲気が違う。

私のこれまでの下松行きの紀行文でもご存知の通り、山口県内の都市間の移動はよそ者ながら手慣れているけど、街に入ってから細かいところになると、やはり弱い。どこをどう走っているのか分からないから、楠君に任せるしかない。今回は助手席に乗っていてよかった。

まず電器店に入る。電源を得るためだが、結局見つからなかった。後日談になるけど、あれから会社の同僚がカー用品店に行くというので一緒に行ってみると、いくつもの用途種類の電源が並んでいた。電器店にもあるかと思っていただけ、始めから行く店を間違っていたのだ。

代わりにデジタルカメラのコーナーでいろいろ吟味する。今すぐ買うわけではないけど専門の楠君にレクチャーしてもらおう。

今持参のデジタルビデオカメラも悪くはないのだけど、155万画素と画素数がかなり落ちる。それでカメラに絞って、新たに欲しいと思っていたのだ。旅先でビデオを回すことはまずないし、近頃のデジタルカメラは安価で、小型の上に性能もよくなっているから、旅には最適だとかねがね思っていた。最近出てきた一眼レフ型のデジタルカメラもあるけど、この手のカメラで車両の撮影をすると、普通の旅行者に見られなくなるから、小振りな薄型のものもいい。全く違う用件で店に入ったとはいえ、いい機会を得た。もっとも、買うにはもう少し資金に余裕ができるまで待たねばならない。

電器店に20分ほどいて、これから錦帯橋へ向かう。すぐの交差点を北へ入ってしばらく行くと、国道2号に出る。平日の昼間だから会社の看板の入った車が多い。あらためて平日の旅をここでも実感する。会社ではみんなが仕事をしているのに、自分だけ休んで遊んでいるという後ろめたさでもあるのだろうか。有休を取り慣れていないせいもあるだろう。

## 「初もの尽くし」の続きを読む